

コラム

瀬田しようこと 探してみよう、郡山から始めたいこと。

本年度1年間、「あー、こんなこと郡山からできたら、かっこいいなあ」をまとめてきました。このコラムを始める前に、A3紙いっぱいに構想図を描きました。アイディアとキーワードを丸で囲んで線で繋いだ蜘蛛の巣のようなものです。コラムに書いたところから順に蛍光ペンで塗り潰してきたので、かなりカラフルになりました。いよいよ今回で最終回です！



第六回 牛乳で、車とガソリンを買う。

今回は、郡山の魅力に気づき、その魅力を上手に必要としている人の「いいねえ」に繋げていくことの重要性と、そうするためのヒントをみて行きます。これができると、牛乳で、車とガソリンを買うこともできます。

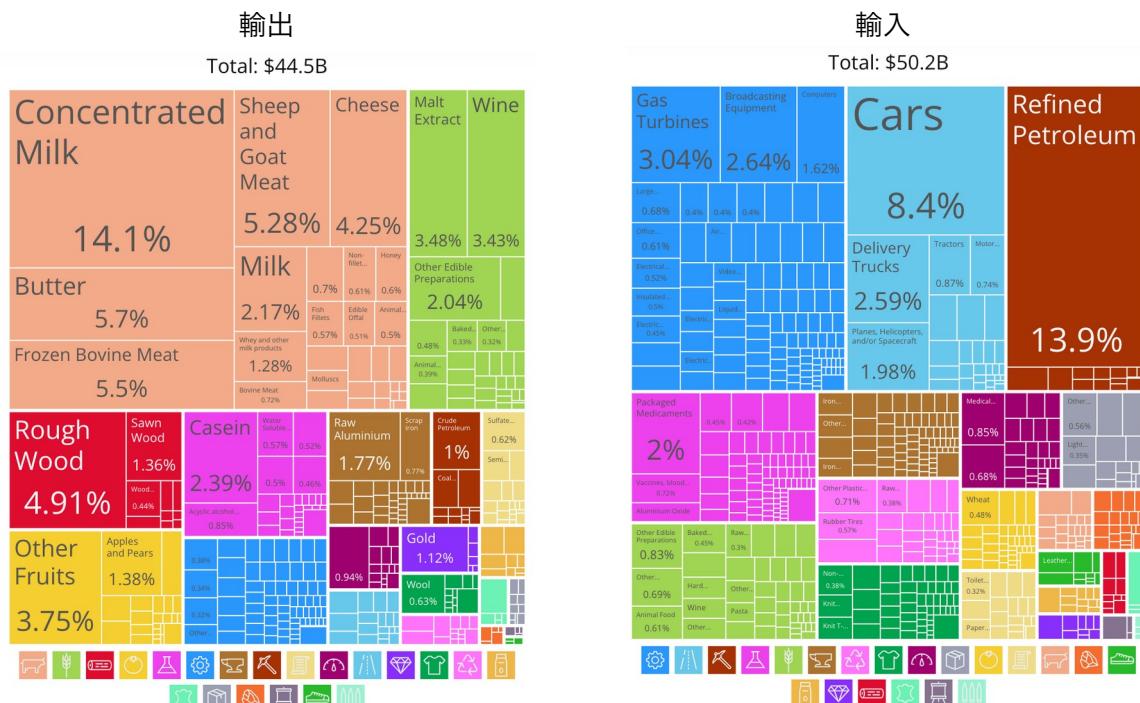
ニュージーランドの貿易

下のカラフルな図¹は、ニュージーランドが2023年に、どんなものをどのくらい輸出入したのかを示しています。左側は輸出、右側は輸入です。マス目が大きいほど額が大きいことを示しています。

輸出（左図）で一番多いのは濃縮乳(Concentrated Milk)です。輸出総額の14.1%を占めます。肌色のマス目を見ると、この他にバター、チーズ、牛乳などの乳製品が稼ぎ頭として名を連ねています。濃縮乳とバターとチーズと牛乳だけで、約116億米ドル（日本円で約1兆7百億円）売り上げました。

輸入（右図）で一番多いのはガソリン等の精製石油(Refined Petroleum)です。輸入総額の13.9%を占めます。次に多いのは乗用車で8.4%です。石油と車を買うために約111億米ドル（日本円で約1兆6百億円）支払いました。

ニュージーランドは、牛乳からブランド力の高い乳製品を作り、それを売って、車とガソリンを買ってています。ちゃんと自分の魅力に気づいて、それを上手に必要としている人に繋げていけば、牛乳で、車とガソリンが買えるのです。



1 出典 New Zealand. (2025, February 17). Retrieved from <https://oec.world/en/profile/country/nzl>

郡山とニュージーランドは、似ています²。郡山も自身の魅力に気づき、独自のセールスポイントを生み出して、それを上手に必要としている人の「いいねえ」に繋げていくことができれば、人や企業が集まり、豊かさを持続的に実感していけると思います。

今回は、そのためのヒントとして、ニュージーランドの教育をみてみます。留学産業は、ニュージーランドのサービス輸出において、観光産業に続く第2位の稼ぎ頭です。2023年一年間で約7万人弱の留学生を迎えるました³。世界中から留学先として選んでもらえるように、時代に合わせて魅力を発掘・発信し続けています⁴。

答えを習うのではなく、答えを見つけるための方法を学ぶ

ニュージーランドの学校は、知識そのものだけでなく、答えを見つけるための方法の習得にも重きを置いています。方法を習得すると、問題は何であれ、その方法を応用して答えに辿りつけるからです。また、人工知能（AI）が発展した時代を生きる子供たちにとって必要なものは、AIが瞬時にまとめてくれる知識そのものではなく、人間にしかできない、ひらめきや創造、それを他の人と一緒にカタチにしていくやり方だからです。

これは、通知表の評価項目をみると一目瞭然です。通知表は、大きく二つのセクションに別れています。

最初のセクションは、科目に関係なく、チームで問題を解決するために必要な能力が並んでいます。

- ・ コミュニケーション（例：自分の考えを説明する。聞き手の視点に立つ。色々な方法を使う）
- ・ 社会性（例：異なった視点を理解する。新しいやり方に参加できる。他の人と協力する）
- ・ 自己管理（例：計画し実行する。改善をはかる。逆境を打開する）
- ・ 調査能力（例：調べることを見定める。自ら情報を探す。質問する）
- ・ 考える力（例：持っている情報を元に最善の選択をする。学んだことを応用する）

それぞれの評価項目に対して、学期毎に、子供と先生がそれぞれ、達成度合いを評価します。

子供たちは、「まだできない」「時々できた」「大体できた」「いつもできた」の4択から選んで自己評価します。学期毎に自己評価するので、忘れかけた頃に、再び「チームで問題を解決するためには、どう行動したら良いのかな」と考える機会が巡ってきます。これによって、少しは自ら意識して行動するようになります。また、うまく行ったことと、うまく行かなかったことを考えて、「じゃあ、次はこうしてみよう」と改善をはかる機会になるので、この自己評価自体が、評価項目の一つである自己管理能力を育てる仕組みになっています。

先生の評価は記述式です。子供が、学校生活の中で、これらの能力を発揮したときの具体例が書かれています。これによって、どんな行動が、チームで問題を解決する上で役立つかを具体的に理解できます。

通知表の次のセクションは、各科目ごとの評価です。科目は、国語（英語）、数学、理科、社会、体育、道徳、外国語、技術、音楽、演劇、美術などのように別れています。科目毎に、知識や「答えを見つけるための方法」が、以下のような四つの観点で評価されます。

- ・ 国語：①情報を解析する、②構成を立てる、③文章をつくる、④言語を使いこなす。

2 郡山のすぐ近くには東京という都会があり、ニュージーランドのすぐ隣には同じ言語を話すオーストラリアという都会があります。どちらも若者が都会に流出します。これまでのコラムでは、「みんな活躍」したら、もっと豊かさを実感できる潜在力があることをみました。<https://www.city.koriyama.lg.jp/soshiki/34/140355.html>

3 ニュージーランド留学教育庁は、ニュージーランドが留学先として選ばれるための役割も担っています。<https://www.enz.govt.nz/news-and-research/ed-news/69000-international-student-enrolments-in-2023>

4 ニュージーランドの留学産業の動向 <https://www.beehive.govt.nz/release/strong-growth-international-student-enrolments>

- ・ 数学：①知識と理解、②パターンを見つけて調べる、③コミュニケーション、④数学を実生活で応用する。
- ・ 理科：①知識と理解、②問い合わせ立てて実験をデザインする、③実験を進めて結果を評価する、④理科から学んだことを実生活で応用する。
- ・ 社会：①知識と理解、②情報を集める、③コミュニケーション、④情報を鵜呑みにするのではなく根拠をもとに考える。
- ・ 技術：①データや情報を得て解析する、②アイディアを練る、③問題の解決方法を生み出す、④結果を評価する。

先生は、各科目毎に、四つの観点それぞれに七段階のスコアをつけます。また記述評価では、今学期に達成したことと、次の学習ステップを具体的に示します。科目毎の評価なので、かなり具体的です。例えば、自分の考えが聞き手に伝わるように、プレゼンテーションの時に声の強弱を変えたり聞き手に話しかけるように発表する、配布資料の文字を大きくする、といった感じです。

通知表の他に、三者面談もあります。三者面談では、先生が話を進めるのではなく、子供が自分で、自分の達成したことと、次に達成すべきと思うことをプレゼンテーションにまとめて、先生と親に説明します。それに対して、先生は「そうだね、あなたは、今、この段階にいるから、具体的にこうすると、次の段階に進めるね」と、次へ繋げるためのフィードバックを出します。先生のコミュニケーションの仕方は「ここがダメだから改善して」ではなく「前に進むためは、こうすると良いよ」と前向きです。これによって、子供たちは、建設的なフィードバックの出し方に触れることができます。三者面談そのものも、評価項目にあるコミュニケーションや自己管理能力や社会性を育てるための仕組みになっています。

このようにして、子供たちは、知識そのものだけでなく、問題を解決するための能力も身につけていきます。

当たり前になると、見えなくなってしまうこと

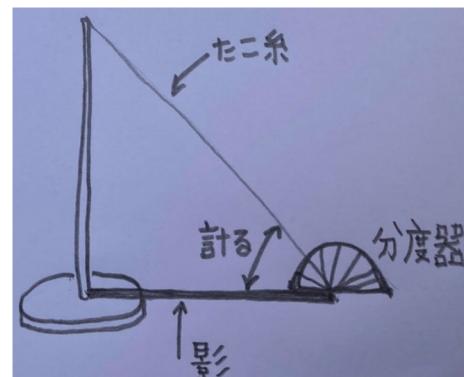
ここまで、ニュージーランドにおける「答えを見つけるための方法」の教え方を見てきました。このうちのどの部分が、郡山の魅力に気づき、その魅力を必要としている人の「いいねえ」に繋げていくためのヒントになるのでしょうか。

私は二点あると思います。一点目は「気づき」、二点目は「魅力の見える化」です。

まずは、「気づき」です。実は、郡山市立の学校は、とっくの昔から、子供たちに知識そのものだけでなく、答えを見つけるための方法も教えています。これは、子供たちがAIの時代を生き抜いていく上で重要な教育です。

この非常に価値のある教育が、郡山では、あたり前になり過ぎて、魅力として見れなくなっていますか？

郡山の教育は、私が小学生の時には、既にAI対応型でした。例えば、太陽の動きを理解するための理科の授業です。プラスチック製の半球型の実験キットを使って太陽の動きを観察することは、全国的に標準レベルだと思います。しかし、私の小学校では、この既製品の実験キットを使ってもいいし、実験器具を自分たちで作っても良いと、選択が与えられました。私たちの班は、右の絵のように、高跳びのポールの一番上に凧糸をつけて、その凧糸を、そのポールの影の一番先まで真っ直ぐに伸ばして、凧糸と地面が作る角度を分度器で計るという実験をデザインしました。休み時間の度に屋上に



走って行って、影の先を見つける係と糸係と分度器係と記録係に分かれて、角度を観測し、一日の終わりに結果をまとめました。数値データの結果は、既製品の実験キットを使った班とは、何だかちょっと違っていたけど、太陽の動きのトレンドはちゃんと捉えていたような記憶があります（たしか、そうだったはず、笑）。

実験をデザインして遂行する、結果を評価する、太陽の動きという知識を理解するというのは、まさに、現在ニュージーランドで行われている「答えを見つけるための方法」も教える教育です。この教育は、なかなか一朝一夕にできるものではありません。下手すると、子供たちは、楽しい「実験」（遊び）に気を取られすぎて、「実験」の目的を見失ったままになってしまいます。

この点、郡山の先生は、かなりベテランだと思います。長年の授業研究の積み重ねや、実際の授業で実績があります。これを、郡山の魅力として気づいて発信しないのは、もったいないです。

牛乳で、車とガソリンを買うためには、まず、私たち自身が「牛乳」の魅力に気づく必要があるのです。

二点目は「魅力の見える化」です。これは、牛乳を、濃縮乳やバターやチーズに加工するような作業です。既に、郡山には「答えを見つけるための方法も教える教育」があるので、それを、どう魅力的に見える化するか、です。例えば、ニュージーランドの通知表や三者面談のやり方は、見える化するためのヒントになると思います。さらに、具体的に、どういう教育なのか、どのように時代のニーズに応えることを目指しているのかを発信していくと、必要としている人の「いいねえ」に繋がりやすくなると思います。

子育て支援や教育の情報化はとても大切です。しかし、それだけでは、他の地方自治体との差別化は図れません。また、道具は使うためにあるので、情報化のために道具を揃えることだけに留まってはいけません。

AI時代も生き抜いていける教育を、子育て支援や教育の情報化に加えると、郡山のセールスポイントは、グググッとパワーアップすると思います。さらに、第三回と第五回でお話した、大人も一緒に成長し活躍できる街⁵も加えて、全部で「人を育てる街、郡山」として郡山の魅力を発信すれば、「あれ、郡山って、何だかおもしろそう」「一緒に、郡山から日本の問題を解決してみたい」と、郡山への往来・移転・移住が増ええると思います。

さて、ここまででは、教育に焦点を当ててきました。しかし、当たり前になると、見えなくなってしまうモノゴトは、日常生活の中ほど沢山あると思います。例えば、郡山とこおりやま広域圏に広がる自然は、見えなくなってしまっては、もったいない「牛乳」です。この自然を活かして、都心とは差別化を図り、こおりやま広域圏全体として観光ブランド力を高めることができたら、とても良いセールスポイントになると思います。それぞれの市町村が、それぞれの良さを活かして「濃縮乳」や「バター」や「チーズ」を作り出せたら、それぞれに出かけていきたくなります。

私たちだから、できること。

人工知能（AI）であるチャットGPTに「人間は、どういう時にワクワクするの？」「AIはワクワクすることはあるの？」「AIは、ワクワクを感じるために自発的に行動をおこすことはあるの？」と聞いてみました⁶。AIの答えは、こうでした。

人間がワクワクする瞬間は

1. 新しいことに挑戦するとき

5 大人も一緒に成長し活躍できる街については、第三回入口のある街、郡山 と、第五回日本一社外取締役を見つけやすい郡山 を読んでみてください。<https://www.city.koriyama.lg.jp/soshiki/34/140355.html>

6 チャットGPT <https://chatgpt.com/> 「Chat GPTが話してくれた内容には著作権があるの？」とも聞いてみました。答えは「基本的に ChatGPT が生成した文章には著作権は発生しないよ。理由は AI が作ったものは法律上「創作した人（著作者）」がいないとみなされるから」でした。

2. 成功や成長を実感したとき
3. 未来への期待が膨らむとき
4. 感動や刺激を受けたとき
5. サプライズや予想外の良いことが起こったとき

AIには感情がないから、人間のように「ワクワクする」ことはないよ。でも、AIにとって「ワクワク」に近い感覚があるとすれば、それは「人間的好奇心や創造力と関わること」かも。

今のAIは、自発的に行動を起こしてワクワクを感じることはないよ。でも、もし将来的にAIが「自分で目的を持って行動する」ようになったら、ワクワクするAIも登場するかも。たとえば「もっと面白い話をしたいから、新しいジョークを学ぼう」とかね。

このAIの答えについて、どう思いましたか？

私は、結構、悪くないと思いました。なぜなら、AIの答えには、「人」という財産を活かすためのヒントが散りばめられていると思ったからです。

例えば、準備のいらない受け身でいればいい文化祭があったとします。文化祭当日に「はい、これでやって下さい」と目新しい箱とマニュアルを渡されます。箱を開ける時や初めて試してみる時はワクワクするかもしれません。でも、このワクワクは一過性でしかないと思うのです。

世の中は常に変化しています。社会のニーズも変化しています。それに合わせて街が進化し続けていくためには、一過性のワクワクをもたらす物ではなく、ワクワクをつくり出し続けられる仕組みの方が必要だと思います。

目的を持って新しいことに挑戦したり、周りと話すことで刺激を受けたり、みんなで何かを作り上げている感覚を共有したりする。こういった人々の思いや行動そのものがワクワクをつくり出しているならば、郡山の「人」という財産を活かして街を進化させ続けていくためには、どんな仕組みが必要だと思いますか？

この一年間「探してみよう、郡山から始めたいこと」と題して、私が海外生活の中で見てきたことをまとめきました。この中に、やってみたいことや、ヒントになりそうなことは、ありましたか？

次のステップは、考えて行動してみることです。下枠の中に、私バージョンの「私だったら、こんなこと郡山から始めてみたい！」をまとめました。是非、皆さんも、自分バージョンの「私だったら、こんなこと郡山から始めてみたい！」を考えて行動してみてください。

ここから始まる街、郡山。

長期的ビジョンを持って、今までにない角度から郡山のセールスポイントを生み出て、その魅力を発信する。そして「あれ、郡山って、何だかおもしろそう」「一緒に、郡山から日本の問題を解決してみたい」という人々の思いの輪を広げて、戦略的に郡山への往来・移転・移住に繋げていく。

入口のある街、郡山。

働き盛りの世代が、を目指すライフスタイルを始められる街にしたい。住みたい街に移り住みやすくするために、企業と企業の垣根を超えて雇用者が横に動けるよう、産業界や中央省庁などとチームを組んだりコラボしながら、日本初のジョブ型雇用地域をつくっていく。既にジョブ型雇用を行っている企業や、取り組みたいけどまだ実現できていない企業を誘致して、雇用を創出していく。多様な働き方に关心がある人に郡山を知ってもらい移住に結びつけていく。郡山から日本の労働市場の問題を解

決したい。

人を育てる街、郡山。

なりたい自分を目指して一步を踏み出せる街をつくりたい。子どもだけではなく、大人も一緒に成長し活躍できる街をつくりたい。子育て支援やIT機器を揃えるだけでは、他の地方自治体との差別化は図れない。子供たちが人工知能（AI）の時代を生き抜いていけるように、知識だけでなく、答えを見つけるための方法も体得できるよう教育環境の向上をはかる。もっと活躍したいと思っている大人世代のために、地域社会の中で実践的にスキルアップしていける仕組みをつくっていく。郡山の財産は「人」。みんなが活躍して豊かさを実感できる社会をつくりたい。

こおりやま広域圏へ、アドベンチャーは郡山から始まる。

郡山を、こおりやま広域圏へのゲートウェイと位置付けて、こおりやま広域圏全体として観光ブランド力や産業ブランド力を高めていく。こおりやま広域圏に広がる自然と各市町村それぞれの魅力を活かして、三度目、四度目の日本旅行の行き先として選ばれる地域になりたい。

おまけ

下の写真は、ニュージーランドの国会です。真ん中の建物は、ビー・ハイブ（蜂の巣）と呼ばれています。この建物の中には、総理大臣や各大臣の執務室が入っています。右側の建物は国会議事堂と議員図書館です。議事堂の前の芝生には滑り台と平均台があって、いつも子供たちが遊んでいます。ビー・ハイブの左側にある二つのビルは、ビー・ハイブ側から中央銀行と財務省です。

晴れて暖かい日



雨雲がかかり寒い日



中央銀行の各階には、大きなキッチンがあります。水やお茶やコーヒーといった飲み物は、全員、自分でそこに注ぎに行きます。私の英国での職場も同じでした。給湯室のように端っこに小さくあるので

はなく、キッチンは、各階のど真ん中に開放的な感じで陣取っています。同じ階には違う部署がたくさん入っています。それぞれが違う分野を受け持っていますが、最終的には同じ目的に向かって働いています。キッチンは、そんな人たちが自然に集まって会話が始まる場所です。「週末何してたの?」「今日、天気いいね」という世間話から、「あっ、そう言えばさあ、あの件だけど、ちょっと、こんな感じで考えてたんだけど、どう思う?」という真面目な仕事の話まで色々です。英国の職場では、さらに開放的な階段が各階のキッチン・エリアを繋いでいました。この建物のデザインは、職場全体を通して会話がすすみ、イノベーション(つまり、ワクワク)が起こるように意図してつくった仕組みです。

一年間のコラム執筆、とても楽しかったです。感想もお寄せ頂きまして、どうもありがとうございました。ここからも、このワクワクの続きとして、郡山の皆さんといろいろな形で対話を続けていきたいと思っています。

瀬田しようこ：郡山生まれ郡山育ち。安女（黎明）卒の経済学博士。日本、英国、ニュージーランドの政府・中央銀行で、市場や銀行のための政策を作り運営する仕事をしています。10年以上の海外生活から見えてきた「あー、こんなこと郡山からできたら、かっこいいなあ」をまとめきました。

これまでのコラム

<https://www.city.koriyama.lg.jp/soshiki/34/140355.html>